# ビデオ観測された水星食の現象時刻の解析

宮下 和久1, 相馬 充

(2009年10月30日受付;2010年2月10日受理)

# An analysis of a lunar occultation of Mercury observed by video

Kazuhisa Miyashita and Mitsuru Sôma

### **Abstract**

A lunar occultation of Mercury was observed with video equipment on 2008 December 29 by two Japanese amateur astronomers Masayuki Ishida and Hisashi Suzuki. Although the event occurred in the daytime, the light variation during the event was successfully analyzed using Limovie, software to extract quantitative data of light intensity from video (Miyashita et al. 2006). Additionally, using the functions by Hapke (1986, 1993) for the brightness distribution on Mercury's apparent disk, we have been able to obtain precise central times of the reappearances of Mercury, which enable us to get precise lunar limb corrections.

### 1. はじめに

2008年12月29日昼に起きた月による水星の 掩蔽は、国内のアマチュア観測者により観測が 行われ、ビデオ撮影がなされた。筆者らはそれ らのビデオの提供を受け、測光用ソフトウエア Limovieによる測光と、それにより得られた光量 変化と水星の輝度分布モデルとの比較により現象 時刻の推定を行った。水星の輝度分布モデルには Hapkeの関数を用いた。その結果、従来は困難 とされてきた、面積のある天体の掩蔽現象から月 縁を推定できるような精密な時刻データを得るこ とができた。本論文では現象の解析の手法と時刻 測定の結果について述べる。

## 2. 観測

観測は滋賀県の石田正行氏と静岡県の鈴木寿氏により行われた。両氏とも、星食や接食の観測に熱心に取り組んでいるアマチュア観測者である。両観測地における星食の状況を図1に示す。この

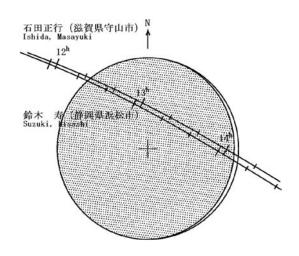


図1 水星食の状況図



図2 水星食の見られる範囲

<sup>&</sup>lt;sup>1</sup> IOTA, 星食観測日本地域コーディネーター (JCLO)

表 1 観測記録と解析結果

(経緯度は世界測地系、時刻は 2008 年 12 月 29 日の UTC)

観測者	石田正行 (滋賀県守山市)	鈴木寿 (静岡県浜松市)
観測地	東経 135° 56′ 33″.6	東経 137° 42′ 48″.4
	北緯 35°06′22″3	北緯 34° 45′ 53″.8
	標高 85m	標高 50m
望遠鏡	30cm シュミットカセグレン	25cm ベイカーリッチークレチアン
ビデオカメラ	WATEC WAT100N	WATEC WAT100N
	高速シャッター使用	高速シャッター(1/10000 秒)
		ゲイン 手動設定 3/14 目盛り
	ガンマ補正機能 OFF	ガンマ補正機能 OFF
記録	miniDV カムコーダーに録画	miniDV カムコーダーに録画
出現中心時刻	05h 08m 24.69s ± 0.10s	05h 13m 40.16s ± 0.08s
月の秤動(l, b	$(-3^{\circ}.034, +2^{\circ}.358)$	$(-3^{\circ}.076, +2^{\circ}.340)$
位置角	273°. 762	269° 664
月縁の高さ	- 1″. 899	- 2″. 283
Watts のデータ	7 -1". 87	- 2″. 54

星食が見られる地域は図2に示すとおりで、日本は昼間の現象ながら、南中前後の現象で、条件の良い場所に位置していたことがわかる。観測地や機材のデータは後に説明する解析結果とともに表1に示した。

水星は2008年12月29日の12時20分(JST)頃に月の暗縁に潜入したが、雲の通過により両氏とも観測することはできず、14時過ぎ(JST)に起こった明縁からの出現についてのみ観測がなされた。昼間の現象で、月齢はわずか1.6、太陽からの離角が18°という、空の明るい場所での現象であったが、いずれの観測も適切な感度やゲインの調整がなされていたことから、撮影されたビデオはノイズの少ないたいへん安定した画像となっていた。また、星像の白飛び(サチレーション)もなく、光量変化を測定するのに最適なビデオであった。

## 3. 測光

これらのビデオについて、測光用ソフトウエア Limovie<sup>1)</sup> を用いて光量変化を測定した. この現象は月の明部からの出現であり、水星の光の量を測定するためには、背景光の明るさを正確に差し引く必要がある. Limovie は、地球照などの月縁の影響を最小限にするために、背景光測定領域を長方形に設定する機能を持っている. これを月縁に沿うような方向に置くことにより、背景光測定領域と星像測光用領域双方について、月の明部がかかっている部分の比率をほぼ同じにすることが

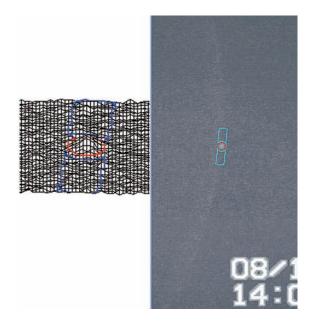


図3 Limovie による測光

青空の中に細い月の明部が見える。細長い長方形の背景 光測定領域を用いることで月縁の影響を除いている。画 像は、図1と同様に、上の方を天の北極方向に向けて撮 影されている。

でき、精度の良い測光値を得ることができる(図3).このようにして得られた光量変化を図4に示す。光量はゆるやかな曲線を描いて増加している。観測に用いられたビデオカメラについては、CCDが受けた光量とビデオ出力との間に直線的な関係があることが確かめられている<sup>1)</sup>ことから、得られた曲線は実際の光量変化の様子を正確に表していると考えられる.

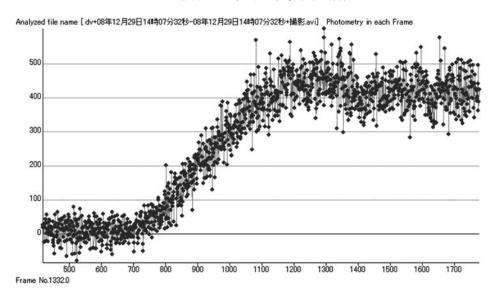


図4 測光の結果

石田氏によるビデオより得られた光量変化. 復光後の振幅は、大気によるシンチレーションに加えて、ゲインが不安定になったものも含まれる. 増光中にはゲインの変化は起こっていない.

## 4. シミュレーションとの比較と時刻測定

### 4.1 水星食の時刻測定の困難点

水星には、月と同じような満ち欠けがある。そ のため, 円形または楕円形に見える天体と異なり, 一般的には現象中央時刻の光量は掩蔽前の50% にはならない. したがって. 光量50%のフレー ムを特定してそれを現象中心時刻として推定す る、という方法を用いることはできない、 さらに、 光量変化には大気のシンチレーションによるノイ ズが乗っていることから、特定の時刻のフレーム をもって正確な現象時刻とすることは適切でな い. また、ノイズ低減のためにフレーム間の移動 平均などの処理を行ったとしても、それでは誤差 を見積もる方法がない. これらの理由に加え、光 電管では背景光の値を正確に差し引くことが困難 であることや、 眼視観測やビデオモニターの目視 による方法では、月縁と水星の縁の接触の時刻に ついて,数秒の誤差が見込まれることなどから, 従来は、水星食などの面積を持った天体の掩蔽現 象から正確な現象時刻を求めることは困難とされ てきた。

## 4.2 シミュレーションモデルの作成

時刻の推定における上記の問題を解決するには、光量の観測値を、食現象において期待される 光量変化のモデルによって近似させ、モデル上で の現象中央時刻をもって求める時刻とすればよい、モデルが適正であれば、得られた時刻は最確 値となるはずであり、誤差も計算によって見積も ることが可能となる。

この方法において、正確な時刻測定を行うた めには、比較するモデルは、可能な限り正確 に現象の様子を表現していなければならない. Hapke<sup>2,3,4)</sup> の関数 (表 2) を用いると、月や水星 などの固体表面を持つ天体について、天体表面 における反射光の強度分布を推定することがで きる. そこで、パソコン上で Hapke の関数によ り水星表面の輝度分布を計算するソフトウエア <sup>注1)</sup> を作成し、図5のようなシミュレーション画 像を得た. プログラムは Hapke<sup>3)</sup> に基づいて作成 し、衝効果を表す関数 B(g) については、 $Hapke^{4)}$ に示されている  $B(g) = 1/[1 + \tan(g/2)/h)]$  を用 いた. ここでgは、衝の位置を0°とした場合の、 太陽の位相角である. また, 単一粒子の平均散乱 を表す関数<sup>注2)</sup> P(g) については、前方散乱と後方 散乱を表す2項よりなる次式を用いた5,6).

 $P(g) = (1 - c)PHG(\pi - g, b) + cPHG(\pi - g, -b).$  (1)

ここで、PHG は Henyey-Greenstein 位相関数であり、次のように表される.

注1) ソフトウエアは Borland 社(現在は Embarcadero Technologies 社が取扱い)の統合開発環境 Delphi6 を用いて作成した.

<sup>&</sup>lt;sup>注2)</sup> 単一粒子平均散乱関数(英語は average single-particle scattering function).

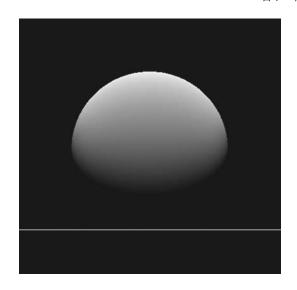


図 5 Hapke の関数より計算した水星表面の輝度分布 月縁との相対的な位置の変化について、0.01 秒間に動く 角距離を1単位としてシミュレーションを作成した. こ の図の場合、水星の直径は2556単位となる、水星が全て 明部だけ(円形)であったとしたら、約5,130,000個の数 値で表面の輝度が表現されることになる. 図中の水平線 は平均月縁であり、図は第4接触の様子を表している. この場合、1回目のフィッティングでは、光量変化の速 さが、恒星と月縁との角距離の変化から予想されるもの より 0.9677 倍に遅くなっている. これは、月縁の傾斜を 反映したものと考えられ,実際の角距離の変化 (RRV) は, RRV=0.2469 × 0.9677 = 0.2389 (arcsec/sec) であると見積 もられる. また、このときの実際の月縁の接地角 (RCtt) は $\cos(RCtt) = 0.9339 \times \cos(Ctt)$  の関係にあることから、 Ctt=25°(=155°)を代入し、RCtt=28°.71を得た. 予報 の Ctt と比べると、月縁は 1/cos(Ctt) を増大させる側に 3°.71の傾斜を持っていると考えられ、これより、平均月 縁に立てた垂線と天の北極方向とのなす角は、現象の月 縁上の位置角 PA = 264°から計算して、264°-3°.71 = 260°. 29 (=80°29) となる. 以上より、水星の暗径の最大の方 向(Q = 85°,03)と実際の月縁に立てた垂線のなす角(RLA) は RLA=85°.03 - 80°.29=4°.74 と求められた.

## 表 2 Hapke の関数

Hapke の関数は一般的に次のように表される.

$$R = \frac{w\mu_0}{4\pi (\mu_0 + \mu)} \{ [1 + B(g)] P(g) + H(\mu_0) H(\mu) - 1 \} S(\theta)$$

R: 反射率(bidirectional reflectance)

g:位相角 (phase angle)

w:単一散乱の反射率 (single scattering albedo)

 $\mu$ : $\cos e$ , e は反射角  $\mu_0$ : $\cos i$ , i は入射角

B(g): 衝効果を表す関数 (opposition effect)

P(g): 単一粒子の平均散乱を表す関数(phase function)

 $H(\mu)$ ,  $H(\mu_0)$ : 複数の散乱の効果

(multiple scattering function)

 $S(\theta)$ : 表面の凹凸の効果 (macroscopic roughness)

θ:表面の平均傾斜

それぞれの関数については、 $Hapke^{3.4}$  に示された式、および、本文中に示した式 (1)、(2) に基づいて計算した.

PHG
$$(T,e) = (1 - e^2)/(1 + 2e \cos T + e^2)^{3/2}$$
. (2)

Hapke の関数に必要な6種類のパラメーターに ついては、Mallama et al.<sup>7)</sup> が、従来の地上観測に 加え、SOHOにより得られた画像も用いて、水 星の等級の観測値と Hapke の関数によるモデル との比較を行い、広い範囲の位相角について適合 する値として、w=0.20、h=0.065、 $B_0=2.4$ 、 $\theta=$ 16, b=0.20, c=0.18 を得ている. Mallama によ る解析結果は、米英暦 The Astronomical Almanac の水星の等級の計算の基礎となっている8).上記 のパラメーターは、その解析の中で得られたもの であり、水星表面の反射特性をよく表していると 考えられることから、輝度分布のシミュレーショ ンを作成するに当たって、これらの値を用いた. また、計算に用いたその他のパラメーターを表2 に示す. 作成したモデルを, 水星の観測より得ら れた等級7)と比較すると、両者はよく一致して いる (図6). このことから、モデルは水星の表 面の輝度を適正に表していると考えられる.

次いで、プログラムは、求められた輝度分布から、月縁に対する任意の水星の向きに対して、0.01 砂ごとに月縁が掩蔽しながら移動した場合に起こる光量変化を計算する。なお、この解析においては、月縁の起伏が及ぼす影響は小さいと判断し、月縁が直線であるとの仮定のもとに計算を行った。

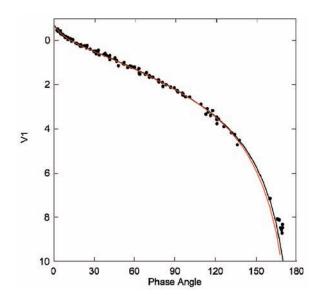


図6 モデルと等級の観測値の比較

Mallama et al.<sup>7)</sup> の Fig. 11 と比較した. 赤い曲線が, 作成したシミュレーションモデルより得られた等級. 衝効果も含め, 様々な位相での水星の等級を高い精度で再現できていると考えられる.

#### ビデオ観測された水星食の現象時刻の解析

## 表3 現象時刻における金星と月の物理量

現象時刻: 2008年12月29日5時8分(UTC)=2008年12月29.214日

水星:

視直径: 5.90 秒角 位相(*i*): 55.89 度

暗径の最大の方向 (Q):85.03 度

月:

月縁の位置角:264度

月縁と垂直方向の相対角速度(RV): 0.2469 秒角 / 秒

接地角 (Ctt): 155 度

(接地角の意味は本文参照)

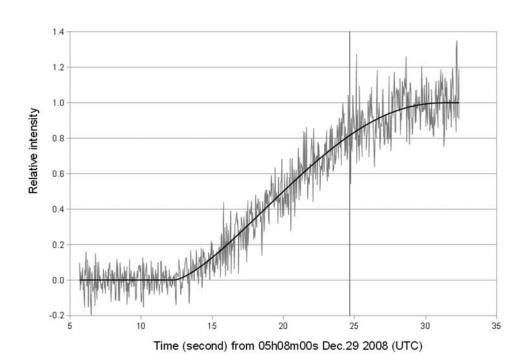


図7 モデルによる近似 石田氏の観測とモデルとの比較. 月縁の傾きを考慮した結果, 良好な近似をおこなうことができた.

## 4.3 モデルとのフィッティングと現象時刻の推定

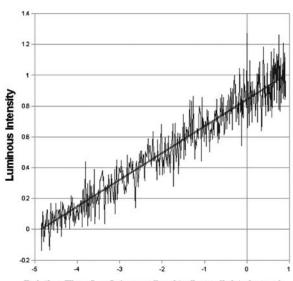
モデルと観測値のフィッティングは、2回おこなう.1回目は、月縁の傾斜がないとした場合のモデルとの比較である。星食観測では、月縁に立てた垂線が月の進行方向に対してなす角を接地角(Ctt; contact angle)とよぶ。光量変化の速さは1/cos(Ctt)に比例し、月縁が月の進行方向に平行に近くなるほど光量変化はゆっくりになる。そこで、星食現象の月縁上の位置角および月の進行方向から求められる接地角を用いて光量変化の速度を計算し、1回目のフィッティングをおこなう.

一方、実際の月縁は平均月縁に対して傾いていることから、通常はこの段階ではモデルと観測より得られた増減光に要する時間は一致しない。そこで、モデルの光量変化を時間軸方向に伸縮させ

て、観測された各フレームの光量との差の二乗の和が最も小さくなるように逐次近似を行い、月縁の傾斜の効果を推定する。さらに、得られた月縁の傾斜より決定される「水星と月縁の方向角」を用いてモデルを再度作成し、2回目のフィッティングをおこなう。こうすることにより、実際の現象に近いモデルとの比較ができると考えられる。フィッティングの結果を図7に示す。

## 4.4 誤差の見積もり

上記のフィッティングからは、現象時刻を正確に求めることができるが、時刻誤差を計算に基づいて求めることはできない。そこで、誤差のみを求めるための方法として、光量変化が直線になるように時間を部分的に変化させてから、最小二乗



Relative Time [sec] (normalized to linear light change)

### 図8 誤差の見積もり

モデルについて、時間を光量の関数で表し、t=f(i)とする.ここで、現象時刻  $(t_0)$  の近傍の光量の変化率を db(%/秒)、現象時刻の光量を bとすると、任意の光量 Iに対応する直線に正規化された時刻 Tは、 $T=(I-b)/db+t_0$ として表される。図は、Tを横軸にとって測定値の変化を描いたもの。これにより現象中央時刻近傍での誤差という形で、最小二乗法により時刻の誤差を求めた。

表 4 算出された係数と時刻の誤差

女子 井田とれた所数と時刻が転圧		
	石田氏の観測	鈴木氏の観測
$a \pm E_a$	$0.8400 \pm 0.0050$	$0.8251 \pm 0.0046$
$b \pm E_b$	$0.05196 \pm 0.000620$	$0.05508 \pm 0.000602$
現象時刻	± 0.10秒	± 0.08秒

法を適用した. 具体的には、時間のスケールについて、モデルが示す現象中央時刻の近傍での時間の長さを 1.0 (基準) として扱い、他の時間帯での時間の進み方を、モデルの光量の増加量に合わせて変化させている。その結果、図 8 に示すように直線として扱うことが可能となり、最小二乗法により一次式  $I=a+b\times T$  に近似させることができる。ここで、I は出現後を 1.0 としたときの光量、T は光量変化が直線となるように正規化した時間、a, b は定数である。これより、係数 a, b の誤差  $E_a$ ,  $E_b$  を求めることができるが、 $E_a$  は光量についての誤差であり、これを時刻に直さなければならない。時刻誤差  $\sigma$ ,  $\sigma$ ,  $\sigma$ 

$$\sigma_t = |Ea|/(|b| + |E_b|) \tag{3}$$

で求めることができる. 石田氏の観測では  $\sigma_t$ = 0.10 秒, 鈴木氏の観測では,  $\sigma_t$ = 0.08 秒と求めら

れた(表 4). 以上より, 現象時刻として次の値を得た.

石田氏の観測 5h 08m 24.69s ± 0.10s (UTC) 鈴木氏の観測 5h 13m 40.16s ± 0.08s (UTC)

## 5. 月縁の地形の推定

月と惑星の位置計算には IPL の最新のこよみ DE421<sup>9)</sup> を用い、月の半径として 1738.0908km を 採用して、今回の水星食の現象時刻から月縁の データを求めた. この月の半径の採用値は. 現 在の地球の赤道半径の採用値6378.137kmと, 日 月食に用いることとされている月の半径と地球 の赤道半径の比の値  $k=0.2725076^{10}$  から得られ るもので、月の地形図作成の際の基準となる月 の平均半径 1737.4km<sup>11)</sup> とは異なることに注意を 要する. 結果は表1に示してある. 月の秤動は Eckhardt<sup>12,13)</sup> に基づき、米英暦 The Astronomical Almanac 掲載の月の秤動と同じ定数を採用して 計算した. 解析に際して、結果を月のこよみの与 える重心に準拠する値にするため、月の位置には 重心と形状中心の差の補正を行っていない。求め た位置角は月の自転軸の北極方向から反時計回り に測った角である。また、月縁の高さは月の採 用半径からのずれを月の平均距離 384399.05km<sup>14)</sup> から見た値に換算している. 表1には比較のため に、Watts<sup>15)</sup> による月縁データも示した.

月縁データは日食の解析から太陽の直径の変化を求める際にも重要である $^{16)}$ . 詳細な月面地形は、日本の月探査衛星「かぐや」により求められた $^{17)}$ . そのデータの精度を調べるためにも、今回得られたような月縁データは貴重である.

なお、上記に加え、月縁の傾斜として次の値が 求められている。

石田氏の観測: 1/cos(Ctt) を増大させる側に 3°.7, 鈴木氏の観測: 1/cos(Ctt) を増大させる側に 5°.7. ここで Ctt は接地角である.

## 6. 結論

水星食を撮影したビデオから光量の変化を測定 し、水星の光量分布モデルとの比較により幾何学 的現象中央時刻を推定した。光量変化はモデルと たいへんよく一致していることから、高い精度で 現象時刻を求めることができたと考えられる. また, 測定された現象時刻は良好な整約結果を示していることに加えて, 月縁の傾斜に関する情報も得られることから, 月縁の地形を求めるデータとして有用である. 従来, 面積を持った天体は食現象の測定に適さないとされてきたが, 表面の輝度分布を見積もることが可能な天体においては, この手法を用いることにより, 恒星による掩蔽と同様に, 月縁の形状のデータを得るなどの精密な位置測定に対して用いることができるようになると期待される.

なお、前述の Hapke の関数を用いると、任意の位相角に対する水星の等級を計算することができる。理科年表や暦象年表の水星の等級の位相角による変化の式は Danjon<sup>18)</sup> によっているが、これは位相角 169°付近で実際より 0.6 等も暗いなど、誤差が無視できないことが明らかになっている<sup>14)</sup>. 理科年表暦部や暦象年表を利用する際には、その点に注意されたい。現在の米英暦では、最近の SOHO 宇宙船の観測結果も含めて求められた Hilton<sup>8)</sup> による計算式が用いられているが、これは Hapke の関数を用いて計算したものとよく一致している.

## 謝辞

石田、鈴木の両氏は、日中の現象という厳しい 条件にも関わらず観測に取り組まれ、質の高い観 測ビデオを提供くださった。また、シミュレーショ ンの作成にあたっては、Anthony Mallama 氏から ご指導をいただいた。これらの皆様に感謝する。

### 参考文献

- 1) 宮下, 早水, 相馬 (2006), 「ビデオ画像用光 量測定ソフトウエア Limovie の開発と星食観 測への応用」, 国立天文台報, **9**, 1–26.
- 2) Hapke B. W. (1981), "Bidirectional reflectance spectroscopy. III. Correction for macroscopic roughness", *Reports of Planetary Geology Program*, p. 475.
- 3) Hapke B. (1984), "Bidirectional reflectance spectroscopy. III–Correction for macroscopic roughness", *Icarus*, **59**, 41–59.
- 4) Hapke B. (1986), "Bidirectional reflectance spectroscopy. IV-The extinction coefficient and the opposition effect", *Icarus*, **67**, 264–280.
- 5) Helfenstein P., Hillier J., and Veverka J. (1997),

- "Albedo dependence of particle phase functions for planetary regoliths", *Icarus*,.
- 6) Domingue D., Hapke B.W., Lockwood G.W., and Thompson D.T. (1991), "Europa's phase curve: Implications for surface structure", *Icarus*, **90**, 30–42.
- 7) Mallama A., Wang D., Howard R.A. (2002), "Photometry of Mercury from SOHO/LASCO and Earth–The Phase Function from 2 to 170°, *Icarus*, **155**, 253–264.
- 8) Hilton J.L. (2005), "Improving the visual magnitudes of the planets in the Astronomical Almanac. I. Mercury and Venus", *The Astronomical Journal*, **129**, 2902–2906.
- Folkner W.M., Williams J.G., and Boggs D.H. (2008), "The Planetary and Lunar Ephemeris DE421", JPL Interoffice Memorandum 343R– 08–003.
- IAU (1983), "Proceedings of the eighteenth General Assembly", Transactions of the International Astronomical Union, XVIII B, p. 71.
- 11) Seidelmann P.K., Archinal B.A., A'hearn M.F., Conrad A., Consolmagno G.J., Hestroffer D., Hilton J.L., Krasinsky G.A., Neumann G., Oberst J., Stooke P., Tedesco E.F., Tholen D.J., Thomas P.C., and Williams I.P. (2007), "Report of the IAU/IAG Working Group on cartographic coordinates and rotational elements: 2006", Celectial Mech. Dyn. Astr., 98, 155–180.
- 12) Eckhardt D.H. (1981), "Theory of the libration of the moon", *The Moon and the Planets*, **25**, 3–49.
- 13) Eckhardt D.H. (1982), "Planetary and earth figure perturbations in the librations of the moon", in *High Precision Earth Rotation and Earth-Moon Dynamics*, ed. O. Calame, pp. 193–198.
- 14) 相馬 (2009),「曆象年表改訂版の問題点」, 国立天文台報, **12**, 1-11.
- 15) Watts C.B. (1963), "The Marginal Zone of the Moon", Astronomical Papers Prepared for the Use of the American Ephemeris and Nautical Almanac, 17, U.S. Government Printing Office, Washington, D.C.
- 16) Sigismondi C., Dunham D.W., Guhl K.,

- Andersson S., Bode H., Canales O., Colona P., Farago O., Fernández-Ocaña M., Gabel A., Haupt M., Herold C., Nugent R., Oliva P., Patel M., Perello C., Rothe W., Rovira J., Schaefer T., Schnabel C., Schwartz D., Selva A., Strickling W., Tegtmeier, A., Tegtmeier C., Thome B., Warren W.H. (2009), "Baily's beads atlas in 2005–2008 eclipses", *Solar Physics*, in press.
- 17) Araki H., Tazawa S., Noda H., Ishihara Y.,
- Goossens S., Sasaki S., Kawano N., Kamiya I., Otake H., Oberst J., and Shum C. (2009), "Lunar Global Shape and Polar Topography Derived from kaguya-LALT Laser Altimetry", *Science*, **323**, 897–900.
- 18) Danjon A. (1949), "Photométrie et Colorimétrie des Planètes Mercure et Vénus", Bull. Astron., 14, 315–345; Danjon A. (1953), "Erratum", Bull. Astron., 17, 363.